

## 戦争を詠むか 久永草太

一年前の「短歌研究」二〇二一年六月号は、篠弘の「戦争と歌人たち」を特集していた。

・涙拭ひて逆襲し来る敵兵は髪長き広西学生軍なりき

「再び北支戦線」渡辺 直己

・軍衣袴も銃も剣も差上げてあかつき渉る河の名を知らず

「波折」『山西省』宮 柁二

篠が「中国大陆における戦地詠として傑出する」とした二者の秀歌を引いた。いち兵士として戦線に身を置きながら歌を詠むという困難は、今の我々には想像することすら難しい。それほどまで平和が続いてくれたのは有難いことである。が、この特集から一年の間に、その平和の雲行きは目に見えて暗澹としつつある。

この原稿を書いている七月の頭、まだロシアによるウクライナ侵攻は続いており、ルハンシク州を掌握したロシア軍は次なるドネツク州を標的に、攻勢をますます強めている。

戦争を題材として歌を詠んでよいものか、時折悩ましく思うことがある。私は戦争をじかに見知っていないし、たとえ侵略戦争だとしても、どちらか一方の国に応援的態度をとってよいものか、恐ろしいのである。角川「短歌」二〇二二年七月号「戦火を目の前に」と題した緊急特集の中で、森山晴美も「無責任に詠めない」とその難しさを吐露していて、頷きながら読んだ。

篠の特集からちょうど一年後の「短歌研究」二〇二二年六月号の特集は「正面からの機会詠論」。「コロナ・戦争・災害を詠むということ」と副題のされたそれはまさしく、この雲行き怪しさとどう対峙するべきかを問うた特集だ。新聞歌壇に着目した小池光が取り上げた歌を一首。

・ウクライナのニュースを背中であらわす爆撃音に包丁止まる

「信濃毎日新聞」歌壇 鹿野 好子

また、春日いづみが総合誌から取り上げた歌を一首。

・戦争といふ夜を歩かされてゐる子どもたちその素足は見えず

「短歌」二〇二二年五月号 大口 玲子

兵士でも、戦争の当事者でもない、しかし無関心でいてはならない、という距離感の中で、メディアを通して見た戦争状態を詠うこれらの歌が、日本に住まう我々が実感を含めて詠み得る限界線のように思う。しかしそれは、メディアに左右されながら詠むことにならないか。同特集の中で高野公彦が「機会詠」について、「事件があった。その時こんなことを思っていた人がいた」という小さな証明、だと述べている。出来事の進行中で詠む機会詠は、のちに事実の矛盾や歪曲が発覚することもあるだろう。しかし、それを恐れてこの時流を無視してしまう、詠むのを避けるというのは、その事象の風化に加担してしまう事であり、よほど罪深いものかもしれない。永田の歌が身に染みる。

・二年後にまだウクライナを詠へるか忘れてゐないか飽きてゐないか

「短歌研究」二〇二二年六月号 永田 和宏

この時評が誌上に載る九月。そのころには戦争が終わり、彼らに平和が訪れていることを祈らずにはいられない七夕である。